

AYUMI

FUMI

TOMOKO

KOZO

CHIKAKO

ICHIRO

MINAKO

ATSUO

YOICHIRO

YOKO

ERI

JANIS JOPLIN

BARBARA STREISAND

バーバラが歌って

落合恵子

朝日新聞社

バーバラが歌っている

1990年6月10日 第1刷発行

著者 落合恵子

発行者 八尋舜右

印刷所 大日本印刷

製本所 清美堂製本

発行所 朝日新聞社

編集・図書編集室 販売・出版販売部

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03-545-0131 (代表) 振替・東京0-1730

©Keiko Ochiai ISBN4-02-256167-X Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

目次

風が吹く	5
フルートの手紙	24
静かな電話	40
泣き虫	73
誰も知らない	102
迂回の傷	125
おだやかな再会	158
紙の花	184
嘘の時間	209
普通のこと	247
逃避からの逃避	272
あがない花火	305
バーバラが歌っている	

装画·装裱
宇野亚喜良

バーバラが歌っている

風が吹く

「ほらー、あんなに桜が。見て、見て」

助手席にいる祖母のフミが、身を乗りだすようにして前方の路面を指さす。

「ほらー、まただよ」

運転をする亜弓に笑いがこみあげてくる。

「ほら、きれいいじゃないの」

バックミラーで確認をしながら、桜並木の左車線を歩道に沿って亜弓はゆっくりと走らせる。まもなく夜の十一時になる。それでもけっこう車が多く、亜弓の車を追い抜いていくたびに風を起こす。その風が、路面に散った桜の花びらを舞いあげる。フミの指先は、桜の花びらの渦を追っているのだ。った。

「わあ、あんなに。ほら、ほら、ほら」

シートベルトをはずし、顔中を感嘆符にしているフミが、亜弓には可愛くてならない。小さなからだを浮かせて、ダッシュボードに手をつく姿は、子どものように無邪気だった。

街灯でひととき明るい場所がある。すでに何台かの車が停まっている。亜弓は、車をさらに寄せて

停めた。

「見事だねえ」

フミは、シートによりやくからだを落ち着かせた。

「きょうが満開ってところだね」

「連れてきてもらってよかったよ」

亜弓は少し笑う。亜弓の方が連れ出されたからだだった。

小一時間ほど前、放送台本を書いていた亜弓の部屋を小さくノックして、フミが顔を覗かせたのだ。
つた。

「どうしたの、こんな時間に」

フミが起きている時間ではなかった。

「風が吹いているんだよ」

フミはそう言った。

「うるさくて眠れないの？」

ドアから覗くフミの首が、小さく振られた。

「風が怖くて寝られないのかしら？」

「まさか」

さすがにフミは苦笑した。

「それに、どうしたの？ そんなに着込んで」

シッと、フミは口に指を当てた。

「あのひとが起きてくるから」

あのひととは、フミの娘であり、亜弓の母の知子のことである。あのひとが起きてしまえば、すべてが終わりだというように言ったフミを思い出して、亜弓は笑った。

「何がおかしいんだい？」

セーターで着膨れた助手席のフミが、怪訝な顔を亜弓に向けている。

「あのひとが起きなくてよかったわね」

フミの顔が、満面のいたずら顔になる。

「ほんとだよ。あのひとが起きちゃったら、こんなに贅沢な（ぜいたく）お花見はできなかったもの」

風がいくらか強まったのかもしれない。少し激しく桜の花びらが散っている。

「もったいないねえ。あんなに散っていく」

祖母の声は、亜弓にどうにかできないのかと言っているようだ。

「フミさん」

えっ？ と、亜弓を見たフミの顔が、街灯の明かりのせいなのか、桜の花の色を映しているせいなのか、透き通るように白い。

「あの花びら全部、糊で止めてくれれば？」

フミの顔がくしゃくしゃとほころんだ。

「ほんとに、そうしようか。亜弓さんとふたありで」

ふたありで、と繰り返しながら、亜弓はフミの頬に手を伸ばした。

化粧をしたことのないフミの滑らかなポチャポチャした頬に触れるのが好きで、亜弓は時折りそうすることがあった。

「糊を片手にふたりで木にのぼって、花びらをくつつける」

「一枚一枚、ね」

亜弓の手の中のフミの顔が楽しげに頷く。

「こんな夜中に、桜の木にのぼっていたら驚くだろうね」

「女がふたり。それも、七十六歳と三十五歳のね」

フミが、くくくつと笑った。

「それはとても面白い図よね、きつと」

亜弓も笑った。

「亜弓さん、天井を開けてよ」

フミは、ルーフ・トップのことを、何度教えても天井と言った。

「寒いわよ、きつと」

「これだけ着てるんだもの、平気ですよ」

着膨れたからだをフミは叩いてみせた。それから、自分でリクライニングのシートを倒した。

「わあ、桜の枝に手が届きそうだよ」

見上げると、車の天井が一面の桜模様になっている。

「亜弓さんもうしてごらんよ」

フミに言われるままに、亜弓もシートを倒す。桜吹雪が天井から舞い込んでくる。

「誰だい、桜の花びらを糊で止めちゃおうなんて言ったのは」

「ほんとに誰だったかしら、風情がないことを言ったのは」

フミが笑って、亜弓が笑った。

「桜は夜桜に限りますね」

亜弓は黙って風に舞う花びらを目で追う。

「桜の樹は黒いでしょう？ だから、花びらのあの淡い色が映えるんですよ」

言われてみると、確かに桜は、どの樹よりも枝や幹が黒い。

蒼味が底にある白い花びらが、車の中に下りてくる。

「桜色」

フミが言った。

「わたしは、染井吉野が好き。それから山桜の花が好き。八重の桜は、すこーし苦手」

すこーし苦手というフミの言いかたが面白くて、亜弓はフミを見た。

「眠くない？」

「ちつとも」

フミはゆつくりと首を振った。

「寒くない？」

フミは、今度は亜弓に顔を止めて、花冷えだねと言った。亜弓は手を伸ばしてルーフ・トップを元に戻す。

「亜弓さん」

「なに？」

「長生きするもんだよね、亜弓さん。車の中に居ながらにしてお花見ができるなんて……、贅沢なもんだよね」

亜弓は胸が熱くなった。天井に向けて花を見続けるフミの姿が滲んだ。

なんという、ささやかな贅沢。

「風邪をひかせたらどうするの」

母の知子にそう叱られるだろう。それでも祖母に誘われるままに出てきてよかった、と亜弓は思う。いつもなら、とつくに寝ているはずのフミがすっかり出かける支度をして、亜弓の部屋をノックした。それはかつてないことだった。仕事中の亜弓には、電話も取り次がない決まりになっている。

リクライニングを操作して起きたフミの背中を見詰めて、亜弓は、不意に不吉な予想をした。それを慌てて打ち消すように亜弓は言った。

「うんと長生きして、うんと贅沢しようね」

亜弓の言葉に、フミは答えなかった。黙って頷いただけだった。

それからしばらくして、亜弓さん起きてごらん、と言った。言葉に楽しそうな響きがある。

「ほら、あそこ。歩道橋の階段のところ」

フミは指ささない。向こうから見えないように気をつかっているのだとわかる。

歩道橋の階段の、ちょうど中段ぐらいのところに、少女と少年が並んで腰をおろして桜を見ている。

「いいねえ、自然で」

フミはそう言った。

「わたしたちの時は、いつも男と女が引き離されていたから、あんなふうにはいかなかった。男のひとと向かい合うと、どうしてもぎこちなくなつた。……いいねえ」

亜弓だって、祖母のフミと同じだった。女子中、女子高へ通つたというだけではなく、共学の大学でも、就職したところでも、女と男の居る場所が分けられている。そう感じてきた。

「いいねえ。見てごらん、ふたりで仲よく並んで」

フミは、ため息をつくように繰り返し返した。

「羨ましい？」

フミが亜弓を振り向いた。

「羨ましいか、だって？」

亜弓は、からかうように頷く。

「羨ましいにきまつてるじゃないの。あんなふうに若くて、あんなふうに自然に女と男がいられるなんて」

フミは静かに顎をしゃくる。フミの顎の先で、少女と少年が何事か話していた。

「わたしらの時代には、女と男のあいだには、いっつも垣根のようなものがあつた。その垣根越しに、女は男を、男は女を見てきたような気がするよ。あのふたりのようだったら、時代だって変わっただろうにね」

フミがふたりの俄かなフアンになったかのように思える。

少女と少年の歯がまた白く光る。

「いいねえ」

フミはもう一度そう言ったあとで、幾つだろうと訊いた。十五、六歳じゃないかと亜弓は答える。

「そうだろうね」

フミは何度か頷いている。

「あの年頃、フミさんは何してた？」

フミは頷くように首を振るのをやめない。

「忘れちゃった？」

少女たちから亜弓に目を移したフミは、忘れるもんか、と呟くように、しかし強い語調で言った。

「初めてひとを好きになった歳だもの」

「へえ、それは、それは。……初めて聞く話」

「亜弓さんが訊かなかっただけのこと。訊かれたら話したよ」

「フミが真顔なのが、亜弓には面白い。」

「わたしが十五の時に、初めて普通選挙があつたのよ」

「唐突な話になった、と亜弓は思った。」

「もつとも普通選挙になつたといつても、女にはまだ選挙権がなかつたんだからね」

さりげないフミの言いかただったが、亜弓は、あつと思つた。女が選挙権を持つようになったのは、敗戦後のことだつた。まだ五十年にもなっていないのだ、と改めて気づいたのだ。

「むかしから平等のように思っているだろうけど、女が人間並みになって、まだいくらもたっていないんだから」

次々と枝を離れて、桜の花が散ってくる。車のフェンダーが桜色に染まっているかと思うと、風が吹いて一掃していく。そんな景色に見とれながら、亜弓は、祖母フミの言葉で気づいたことから自由になれなかつた。

「日本の女が選挙権を得て、五十年にもなっていない」

それをフミは、女が人間並みになって、いくらもたっていないのだと言つたのだ。

フミがちらつと亜弓に目を流して、わたしが初めて好きになつた男がね、と言つた。

「フミさんの初恋」

亜弓はからかいの気持ちでこめた。しかしフミは、そ、わたしの初恋、と軽く受けて続ける。

「わたしより十歳上だつた。二十五歳のあのひとにも選挙権ができたわけさ。第一回の普通選挙に行

ってきたって、うれしそうに言ってたよ」

フミは、シートに舞い込んでいた花びらを指で集めながら話している。

「わたしも二十五歳になったら投票に行けるの？　って訊いたの」

「そしたら？」

「長いことわたしの顔を見てた。それから、女だもの、と言ったの」

フミの掌に相当の桜の花びらがのっている。亜弓も何枚かつまんで、フミの手に散らす。

「昭和三年のことだから無理もないと言えるけど……、わたし、無性に腹がたったのね。それじゃあ、男のひとだけでお饅頭食^{もちやう}べてるだけじゃないのって怒ったの」

亜弓は思わず声を出して笑った。二十五の青年に、十五歳の少女が噛^かみついている様子を目に浮かべたのだった。

「おかしいかい？」

真顔のフミに、亜弓は、ごめんなさいと謝った。

「そしたらあのひと、フミさんも饅頭を食べたいかって」

「……」

「もちろん食べたいって答えてから、言ってやった。わたしが好きなら、わたしにも、お饅頭をすすめるべきだわ。自分だけお饅頭を口にくわえてから、あんたも食べるか？　なんて、訊くべきじゃないって」

亜弓は、隣のシートの小さなフミを抱きしめたいと思った。

「好きって、そういうことでしょ？」

「ほんとにそうね」

「わたしだったら、初めに、大好きなひとにすすめるよ。お饅頭だって、選挙権だって」

亜弓は、もう抑えることができなかった。声を立てて笑ってしまった。

歩道橋の階段の少女が、隣にいる少年に、自分のブルゾンを羽織らせようとしている。少年の方が断っている。そのうちに、ひとつのブルゾンにふたりがくるまった。

「ひとを好きになるっていうのは、ああいうことでしょ？」

亜弓は黙って頷く。

「でもね、あのひとはしばらく考えて」

話が、フミの十五歳のときに戻った。

「ほんとにそうだな、と言ったの。俺たちだけが選挙権もって喜んでるようじゃ、駄目だなんて……」

フミは、目をつむって喋っている。

「治安維持法なんてのがあった、物騒な時代だった。軍人さんが威張りくさってて、いやな時代だった。女の言うことなんか、まともに受ける男なんていなかった。そんな時代だから、それを聞いたわたしの方がびっくりさ。……それから心底あのひとを好きになったね」

心底好きになった、と言うフミの気持ちに亜弓はよくわかった。

「それにさ、十歳も違うんだもの。わたしのこと、子ども扱いする大人ばかりだったでしょ。子どもには飴玉くわえさせときゃいい、みたいな大人ばかりだったから……」

「いまだって変わらないでしょ、その辺は」

亜弓は再び、階段の少女と少年を見る。

「そうだよ。だから、まともに聞いてくれて、まともに答えてくれた最初の大人だったんだよ、あ